

Phytophthora chrysanthemi によるキク疫病*

岐阜県農業技術センター ^{わた}渡 ^{なべ}辺 ^{ひで}秀 ^き樹

はじめに

キク疫病は、1972年9月に東京都内で栽培中のポットマムで初めて確認され、病原菌は *Phytophthora cactorum* と同定された(陶山ら, 1973; 鍵渡, 1986)。ところが近年、国内では *Ph. cactorum* とは異なる *Phytophthora* 属菌による被害が発生し(渡辺ら, 2007a; 築尾ら, 2007)、病原菌はこれまで未確認の新種 (*Ph. chrysanthemi*) として提案された (NAHER et al., 2011)。本稿では、*Ph. chrysanthemi* によるキク疫病の特徴について述べる。

I 発見経緯

2002年、富山県内の複数の露地コギク生産圃場において、キク苗が萎凋枯死する被害が発生した。罹病部から *Phytophthora* 属菌が分離され、接種により病徴が再現された(築尾ら, 2007)。

また、ほぼ時を同じくして、岐阜県内の鉢花生産施設で、2003年ころから夏期(7月上旬～8月下旬)にポットマムの地際茎が暗褐色水浸状に腐敗し萎凋枯死する被害が毎年発生していた。被害は給水マットを利用した栽培施設や灌水 Ebb & Flow 方式の栽培施設で認められた。発病株から *Phytophthora* 属菌が高率に分離され、接種試験により原病徴が再現された(渡辺ら, 2007a)。

以上の2地域で分離された *Phytophthora* 属菌の形態的特徴および分子系統解析の結果はほぼ一致し、既報のキク疫病菌 (*Ph. cactorum*) とは明らかに異なった。*Phytophthora* 属菌は、これまでに120種以上が知られているが、分離菌の特徴はいずれの種とも完全に一致しなかったため、詳細な検討を経て新種として提案されるに至った。

II 病徴

被害株は、はじめ下葉が黄化し、やがて萎凋症状が認められる。成長期の株で病徴が急速に進展した場合には、下葉の黄化を伴わず全身的な萎凋症状を呈することがある(図-1)。これら被害株の地際茎および下葉の葉

柄基部には暗褐色の病徴が認められ、上位茎葉へ急速に進展する(図-2; 口絵①a, b)。ポットマムを用いた接種試験(30℃条件下)では、3日後に地際茎に病徴が認められ、7～9日後には上位茎へ進展し萎凋症状が認められた。また、被害株の根は暗褐色水浸状に腐敗し、容易に脱落しやすい(図-3; 口絵①c)。これらの症状は、*Ph. cactorum* による症状と酷似しており、両者を病徴から区別することは困難である(築尾ら, 2012)。

本病は、露地圃場において、排水が不良な場所で被害が発生しやすい。底面給水マットを利用したポットマム



図-1 キク疫病の病徴(萎凋症状)



図-2 キク疫病の病徴(地際茎の褐変)

Phytophthora Rot of Chrysanthemum Caused by *Phytophthora chrysanthemi*. By Hideki WATANABE

(キーワード: キク疫病, 同定診断, 防除)

* 本誌第67巻第10号(2013年)に掲載したもの。